

16世紀のキリスト教日本伝来に始まる、 「信仰の音楽」の壮大な旅路とは？

西洋音楽の日本への伝来は、おそらく16世紀のキリスト教の伝来とほぼ同時であったと考えてよいでしょう。キリスト教は聖歌／讃美歌を礼拝における欠かせない要素とするなど、音楽とは切っても切り離せない宗教であり、当然西洋から来た宣教師たちも、キリシタンたちに様々な歌を伝えたに違いありません。禁教ののち、伝えられた歌は様々な形で後世に伝えられていくことになります。

さて、その後の鎖国を経て、19世紀に日本は再び西洋世界との交流を再開しました。19世紀末、偉大なる作曲家ヨハネス・ブラームスは、ウィーンにて、当時の日本のオーストリア＝ハンガリー全権公使の夫人であった戸田極子による箏の演奏を耳にしたといわれています。彼の遺品からは彼自身の書き込みがなされた箏曲《六段》の楽譜が発見されており、この曲に大いなる関心を寄せていたことが伺えます。

そんな《六段》の旋律には、その由来が西洋音楽のグレゴリオ聖歌の《Credo》であり、伝来したキリスト教音楽が後世に残るように隠された一つの形なのではないかという説があります。ブラームスはその類似性に気づいたのでしょうか。そしてもし気づいたとしたら、何を思ったのでしょうか？

今回の演奏会では、キリスト教色を極力抑えた歌詞によって人間の普遍的な生と死への思いを描いた《ドイツ・レクイエム》をメイン曲に据えつつ、「《六段》≒グレゴリオ聖歌」説を軸として、《六段》の300年を経た西洋への里帰りとブラームスをめぐる歴史のロマンの物語を、関連する楽曲とともにお届けいたします。混声合唱に加え、男声合唱あり、女声合唱あり、ソプラノ・ソロありとバラエティに富んだプログラムとともに、国内では演奏機会が少ない室内楽と中規模編成合唱による《ドイツ・レクイエム》を、ぜひお楽しみください。

混声合唱団ブルーメンクランツ



2003年3月創団の社会人混声合唱団。常任指揮者小林昭裕（合唱指揮者・バリトン歌手）、ピアニスト久住綾子を含め、アラフォー世代を中心とした働き盛りのメンバーで構成。アマチュアながら、演奏技術と芸術性の向上に真剣に取り組み、積極的に「同世代のプロ奏者との共演」「同世代の作曲家への作品委嘱」「本邦初演／演奏機会希少作品の発掘」「演出つきステージ」など、オーソドックスな合唱コンサートのあり方にこだわらないステージ構成への挑戦を続けている。創団以来、毎年6月（たまに7月）に定期演奏会を開催し、今回が14回目となる。仕事にも趣味にも本気で取り組むメンバーの情熱が生み出す完成度の高いステージは、毎回来場者より大好評を博している。

会場のご案内

新宿区立四谷区民ホール 〒160-8581新宿区内藤町87番地

地下鉄：東京メトロ丸ノ内線「新宿御苑前」駅 2番出口(大木戸門)より徒歩5分

都バス：品97 新宿駅西口～品川車庫「新宿一丁目」下車

